

2017

第23回

函館港イルミネーション映画祭

第21回シナリオ大賞

函館市長賞〔グランプリ〕

緒方
苑

夢の続きを
空でみる





【作者プロフィール】

おがた その

1986年生まれ 富山県出身 京都市在住。

2009年よりシナリオセンター大坂校にてシナリオを学び、基礎科、研修科、作、現在、長編講評クラス在籍。受賞歴なし。

【あらすじ】

新幹線に乗って函館に向かう、片桐優香（29）と片桐莢夏^{さやか}（18）は一見、ごく普通の姉妹である。しかし、この二人は重大な秘密を抱えていた。莢夏は、優香の両親が、病気で亡くなった娘、莢夏の細胞から作り出された、体細胞ヒト・クローンであった。

秘密を守るために、生まれてから一度も、外へ出ることを許されなかった莢夏。

優香は莢夏と母、美恵との関係が悪化したことをきっかけに、莢夏を生まれて初めての旅行に誘う。

優香と莢夏は、函館の街で、宿のオーナー親子と出会い、莢夏は特技であるマジックを人前で披露し、喝采を浴びる。

優香は、初めて莢夏の生き生きとした姿を見て、安堵する。

莢夏が予約した宿の亡くなったオーナーの妻は、病気で亡くなった『莢夏』と同じ病室にいた友達だったこと、莢夏と亡くなったオーナーの妻は、ずっと、インターネットのチャットで交流を持っていたことを知り、驚く優香。

ささいなことがきっかけで、優香と喧嘩をした莢夏は優香に黙って、宿を抜け出し、一人で函館の街を散策する。

優香は、旅行の前に莢夏にプレゼントしたGPS機能付きのペンダントのおかげで、莢夏の居場所を特定する。

孤独の中で、クローンである自分を否定し、生を肯定できなかった莢夏の心の叫び

を莢夏を追跡していく途中で、思い知って
いく優香。

遂に、優香は莢夏を見つけ出し、莢夏を
強く抱きしめる。

二人は、旅の終わりにオーナー親子と函
館山の朝焼けを見て、旅の楽しさを実感し、
帰京する。

東京の片桐家は、美恵が老人ホームに入
居することが決まり、住んでいた家は売り
に出されることが決まった。生まれ育った
家との穏やかな別れの時間を過ごす優香と
莢夏。

境港から、函館のオーナー親子に電話を
かける優香。二人への感謝とこれから船に
乗ることを伝える。

ロシアへ向かう船のデッキ、紅葉の葉を

飛ばし、空中で燃え尽きるマジックを披露
し、喝采を浴びる優香と莢夏の姿があった。

【人物】

片桐優香 (29) (25) (11) 看護師

片桐莢夏 (18) (14) (0)

優香の姉の体細胞

ヒト・クローン

片桐美恵 (59) (55) (41)

元看護師 優香と莢夏の母

片桐良一 (74) (70) (56)

医師 優香と莢夏の父

葉山亮平 (35) (30)

ロシア料理店 ペートルシユカ

オーナー 鉦太の父

葉山鉦太 (10) (5) 小学生 亮平の息子

《五年前の写真のみ》

葉山雪絵 (25) 亮平の妻 鉦太の母

露店の女性店員

老女

ロシア人の母親

ロシア人の女の子

○東京駅 外観

T二〇三〇年

○同 新幹線ホーム

スーツケースを転がす女、片桐優香（29）と大きなリュックサックを背負う女、片桐莢夏（18）。莢夏、人ごみを興味津々の様子で見回している。

優香、莢夏の手を握る。

優香「莢ちゃん、勝手にどっか行かないでよ」

莢夏「分かってるよ」

優香「莢ちゃん、スマホ持っていないんだから、はぐれたら大変——」

優香と莢夏の歩く先に大きなモニタ

ー。

○モニター

映し出される女性アナウンサー。

アナウンサー「今年は東京オリンピックから、十年の節目の年となり——」

○東京駅 新幹線ホーム

モニターを見つめる優香と莢夏。

莢夏「オリンピック、うちの近くでやってたね、そういえば」

優香「近場でやってても、テレビで見てただけだったね」

莢夏「遠慮しないで、優ちゃんだけでも行けばよかったのに」

新幹線がホームに到着する。

『新函館北斗駅行き』の文字。

新幹線の扉が開く。乗り込む人々。

優香 N 「私、片桐優香、二十九歳。彼女は片桐莢夏、十八歳。私の妹、そして、姉です」

新幹線をうれしそうに指差す莢夏。

新幹線に乗り込む優香と莢夏。

○タイトル『夢の続きを空でみる』

○片桐家・外観

T二〇一二年

洋風の大きな建物。

○同 リビング

豪華な家具に囲まれた部屋。窓際のグランドピアノを片桐優香（11）が演奏している。曲はリストの『愛の夢』

扉の開く音。片桐美恵（41）が中に入ってくる。構わず、ピアノを弾き続ける優香。

美恵「優ちゃん、お姉ちゃんよ」

演奏を止める優香。片桐良一（56）

がベビーカーを押しながら、中に入る。立ち上がり、ベビーカーの中の赤ん坊を見下ろす優香。

優香「……お姉ちゃん」

赤ん坊の頬に指でそっと触れる優香。

優香 N 「私はこの日、もう、二度と会えないと思っていた姉、莢夏と再会しました」

莢夏から指を離し、再びピアノの前に座り、演奏を始める優香。

部屋の中に響き渡る『愛の夢』の旋律。

優香 N 「私達家族は死んでも人に言えない

秘密を持ってしまったということを知ったのです」

○片桐家庭

T二〇二六年

片桐優香（25）がホースで木々に水をやっている。白いバラに水をやる優香。白いバラの繁みの向こうに片桐莢夏（14）の姿が見える。

優香「何、してるの？ 莢ちゃん」

虚ろな表情の莢夏。白バラを手に取り、手の中で握りつぶし、地面に落として、踏みつける。

優香「……莢ちゃん」

優香に近づいていく莢夏。優香の手に持っているホースを奪い、ホース

の先を優香に向ける。水びたしになる優香。

優香、莢夏からホースを奪い返し、莢夏の頭から水をかける。ずぶ濡れになったお互いの姿を見て、かすかに笑い合う優香と莢夏。

美恵の声「何、してるの？ 莢ちゃん」

莢夏に駆け寄り、手首を掴む片桐美恵（55）。

美恵「莢ちゃん、お庭に勝手に出てはいけないと言ってるでしょう。どうして、ママの言う事が守れないの」

笑顔が消え、美恵の手を振り払う莢夏。よろめいて、転倒する美恵。莢夏、足元の土を掴み美恵に投げつける。土が顔面に当たり泥だらけにな

る美恵。

美恵「莢ちゃん」

莢夏、再び土を掴み、美恵に投げつける。土が美恵の胸に当たる。莢夏、次々と美恵にめがけて土を投げつける。

莢夏と美恵を無表情で見つめる優香。

美恵「止めなさい！ 優ちゃん、止めて」

ゆっくりと首を振る優香。土を投げつける莢夏の頬に涙が一筋流れる。

男の声「何やってるんだ！」

片桐良一（70）が莢夏に駆け寄り、

莢夏をはがいじめにする。暴れて良一の足を蹴飛ばす莢夏。足を抑え蹲うずくま

る良一。莢夏、良一を見下し顔に唾を吐きかける。良一、額についた唾

を拭い、立ち上がり、平手で莢夏の頬を叩く。舌打ちして、家の中に入っていく莢夏。

○同・莢夏の部屋

大きな勉強机の上には、大型のノートパソコン。棚に飾られている人形やぬいぐるみ。本棚には小説や思想書など多種多様なジャンルの本が隙間なく詰めこまれている。座卓の前で向かい合って、座っている優香と莢夏。

莢夏「……ごめん、いらいらしてたの」

優香「いいよ、私もやり返したし」

莢夏「……いい子ってどうすればよかった？」

優香の目をじっと見つめる莢夏。

莢夏「……私、小さい頃は どうしてた？」

優香「莢ちゃん……」

莢夏「（涙声で）この家の全てをぶち壊した
くてたまらなくなる時がある」

涙をぼろぼろとこぼす莢夏。

優香 N「いい子でなんて、いなくていいよ、
と私は彼女に言ってやれませんでした。
それが、彼女に求められていることの全
てだったからです」

莢夏を抱きしめる優香。

優香「ねえ、いつか私が外に出してあげる」

莢夏「え？」

優香「一緒に旅行でもしようよ」

莢夏「……あの人たちは二人そろって、外
泊なんてしないしばれちゃうよ」

優香「……何とか方法を考えるから」

莢夏「まあ、期待しすぎずに期待しとくよ」

優香「（苦笑する）」

莢夏「そもそも何で、私、外に出ちゃいけ
ないの？ ちよつとぐらい……」

優香「あなたが『莢夏』と同じ顔だから」

莢夏「……」

優香「知り合いに自分達が『莢夏』と同じ
顔をした女の子を連れているのを知られ
るとまずいから」

莢夏「……確かに、私、戸籍もないしね」

優香「……まあ、私はちよつとぐらいなら、

外に出てもいいと思うけど」

莢夏「……ねえ、優ちゃん、ピアノ、弾いて」

優香「いいよ、どんな曲がいい？」

莢夏「『ジュ・トゥ・ヴー』」

優香「サティね」

○老人ホーム 菖蒲の里 外観

T二〇三〇年

○同 リビング

ピアノの前に座り、演奏を始める優香。『ジュ・トゥ・ヴー』の旋律。ソファに腰掛け、ゆっくりと目を閉じる莢夏。

○同 三階 廊下

花束を持って、歩いている片桐優香（29）。『三〇六号室 片桐良一』と札のついた部屋の扉をノックする。

優香N「医者である父は亡くなった姉の皮

膚から取り出した核を母の卵子に移植し、

母はその子を妊娠し、出産したのです」

○同 三〇六号室

ベッドに横たわっている片桐良一（74）。花瓶に花束の花を活ける優香。

演奏をしながら、莢夏の方を見つめる優香。安らかな寝息を立てて、眠

優香「お父さん、調子、どう？」

っている莢夏。

良一、優香の声に反応することなく、

優香N「彼女は小児脳腫瘍で十歳でこの世

を去った、私の一歳違いの姉、莢夏の体

優香「お父さん、優香だよ、分かる？」

細胞ヒト・クローンです」

ベッドサイドの椅子に座り良一の手

を握る優香。目を開いているが優香のことは視界に入っていない様子の良一。

○片桐家・リビング（夕）

ピアノを弾く優香。曲はリストの『愛の夢』。扉の開く音。片桐莢夏（18）が入ってくる。優香を見て、眉間に皺を寄せる莢夏。優香、莢夏の目線に気づき、演奏を止める。

優香「怖い顔。もうすぐご飯の時間だから、

ママ、呼んできてよ」

莢夏「『鑑賞会』してる」

優香「……一昨日もやってなかった？」

莢夏「思い出に浸りたいんじゃない」

莢夏に背を向けて、立ち去ろうとす

る優香。首を振り、優香の袖を引っ張る莢夏。

○同一階 シアタールーム（夕）

カーテンを閉め、電気を消してある、薄暗い室内。ソファに座り、リモコンの再生ボタンを押す片桐美恵（59）。

○ホームビデオ

大型のテレビの画面に一面の紅葉が映し出される。片桐優香（7）と片桐莢夏（8）が映っている。無邪気に笑い合い、紅葉の葉をお互いの頭に乗せる優香と莢夏。

優香「お姉ちゃん、これあげる」

優香の手の中には、美しい青い石。

莢夏「優ちゃんのは？」

優香「私はこの間、同じようなの見つけたからいいの」

優香と莢夏に微笑む片桐美恵（37）。

美恵「まあ、優ちゃんはお姉ちゃん思いね」

優香の手を引き、地面に寝転がる莢夏。

○片桐家 一階 廊下（夕）

扉を細く開けて、テレビ画面と美恵の後ろ姿を見つめる優香と莢夏。

莢夏を横目で見る優香。莢夏、画面を無表情で見つめている。美恵、画面の中の幼い優香と莢夏を見て涙ぐむ。

美恵「莢ちゃん、優ちゃん、いるんでしょう」
びくっとして、顔を見合わせる優香

と莢夏。

美恵「あなたたちが一緒に見てくれなくなつて、何年経ったかしら」

扉を開け、シアタールームに入る優香と莢夏。美恵、画面を凝視したまま、ハンカチで目元をぬぐう。

美恵「本当に二人とも天使みたい」

舌打ちする莢夏。画面の中の幼い優香と莢夏を虚ろな表情で見つめる優香。

○同 階段（夕）

階段を上っている優香と莢夏。

踊り場には、美しい桜の絵とイチヨウの絵が飾られている。

莢夏「自分を客観的に見られないって悲惨」

優香「……」

莢夏「（自嘲気味に笑い）お前が言うなって

感じか」

優香「……許してあげて、あの人は思い出

が何よりも大事なの」

莢夏「（鼻で笑い）ねえ、それよりもアマゾ

ン届いた？」

優香「さっき、受け取った。あんた、ネッ

トショッピングも大概にしなよね」

莢夏「どうせ、ネット中毒のオタクです」

優香「何買ったのよ」

莢夏「内緒」

○同 リビング

ソファに座っている疲れた表情の美

恵。

優香、美恵にティーカップに入った

お茶を差しだす。受け取る美恵。

美恵「休み、いつまでなの？」

優香「今月末までね」

美恵「もっと、休めないの？」

優香「バカ言わないで。ママが身体がしん

どい、しんどいって言うから、無理言つて、

休みとつたのよ」

美恵「ねえ、もう、看護師なんて辞めちゃ

いなさいよ」

優香「何だよ？」

美恵「夜勤なんてなくて、もっと、家にい

られる仕事をしてちょうだい」

優香「……莢ちゃんのこと？」

美恵「もう、これ以上、あの子と二人きり

にしないで」

優香「まあ、止める人がいなくなつて、弱気になるのも分かるけどね」

美恵「（大声で）お父さんなんて、大抵は見えて見ぬふりだったわ」

優香「……」

美恵「（震える声で）あの人はね……結局、『実験』がしたかっただけなの」

優香「……ママ」

美恵「（涙ぐみ）ずっと我慢してきたのよ」

優香「我慢つてそんな言い方……」

美恵「あの子、絶対、おかしいわ。子供の頃は親の言う事をよくきくいい子だったのに」

優香「まあ、イライラするのは分かるけどね」

美恵「どうしてよ、何不自由ない生活を送れてるじゃないの」

理解できないと首を振る優香。

優香「（ため息をつき）ママ、あのね、そういうところが、莢ちゃんをいらつかせ——」

美恵「何か、こげ臭い」

顔を見合わせる優香と美恵。

○同庭

炎に包まれている木材。炎をじっと見つめている莢夏。莢夏の元に駆け寄り、炎を見て、悲鳴をあげる美恵。消火器を抱え、莢夏に駆け寄る優香。莢夏を炎から遠ざけ、消火器のノズルを炎に向けて、中身を噴射する優香。

白い煙が炎を包み込む。火が完全に消え、黒い消しズミになった木材。

その場に座りこむ優香。

莢夏「マジックのね、練習してたの」

莢夏、優香と美恵の目の前で、指を鳴らす。莢夏の指先に小さな炎が点く。炎をふつと吹き消す莢夏。

莢夏「失敗しちゃった。説明書通りにやつただけどー」

莢夏の頬を平手で叩く優香。莢夏、叩かれた頬を手で押さえる。消火器を抱え、家の中に戻っていく優香。地面に座り込み、泣き崩れる美恵。

○同 リビング

『愛の夢』を演奏している優香。突如、シューベルトの『魔王』が鳴り響く。演奏を止め、顔を上げる優香。莢夏

がコンポの前に立っている。

優香「うるさい」

音量を下げる莢夏。

優香「あんた、ママに家に放火しようとしてたって思われてるよ」

莢夏「あれま」

優香「もう、私が何を言ってもだめみたい。

あんたが自分でちゃんと説明しなさいよ」

莢夏「本当に放火しようとしてたかもよ」

優香「え？」

莢夏「逮捕されたら、親に監禁されてむかついてましたって言おうかな」

優香「……そんな冗談言えるようになったの」

くつくと笑う莢夏。莢夏をにらむ優香。そんな優香を見て、寂しげに笑

う莢夏。

優香「……何であんな事、したの？」

莢夏「ポリシヨイサーカスの動画見て、真

似したくなつたの」

優香「（ため息をつき）……莢ちゃん」

莢夏、ピアノに近づき、黒鍵を鳴らす。

莢夏「『愛の夢』、好きなの？」

優香「好き」

莢夏「この家にはとんでもなくグロテスク

だと思ふわ」

優香「……夢に溺れてる人達の家だもんね」

莢夏「でも、その夢には愛はない」

優香「……愛なの。莢ちゃんにはひどい話

だと思ふけどね」

虚ろな表情でピアノに触れる莢夏。

扉の開く音。美恵が中に入る。泣き

腫らした赤い目をした美恵。美恵の

顔を見て、あざ笑う莢夏。美恵、莢

夏を見て、

美恵「悪魔」

莢夏「あなたが作つたんでしょ」

美恵「もう、消えてちょうだい」

出て行く美恵。

○同 莢夏の部屋

ベッドに腰かけている優香と莢夏。

優香「ママ、疲れてるんだと思うの」

莢夏「それだけだったら、いいけどね」

虚ろな目をして、爪を噛む莢夏。

優香「ねえ、一緒に外、出てみない？」

莢夏「え？」

優香「ちょっとこの家を離れて見るのも、

お互いの気分転換になっていいんじゃない

い」

莢夏「……とつくに忘れてたと思ってたよ」

優香「忘れないよ。ママが不安定だったから、先延ばしにしてたけど……もう、こ
うなっちゃったら、いったん、離れてみて、
頭を冷やすのもいいでしょ」

莢夏「……でも、無断で行くってことだよね」

優香「ふうん、こういう時だけはいい子なの」

莢夏「(むつとして) そんなんじゃない」

優香「さすがに、ママにあんな事言われて
シヨックだったんだ」

莢夏「うるさい」

優香「外に出るのが怖いのか?」

莢夏「別に怖くないもん」

優香「……前に家出しようとして、こっぴ

どく叩かれたもんね、父さんに」

莢夏「……」

優香「……痣、まだ残ってるんでしょ」

上着を脱ぐ莢夏。莢夏の二の腕に指
の形をした赤黒い痣がくつきりとつ
いている。

莢夏「……怖かった。穏やかな人だと思っ

てたから。ママもめっちゃ泣いてたし」

優香「でも、その怖い父親は施設に入って、

もうこの家にはいない」

莢夏「……ママが」

優香「言ったでしょ。あの人、疲れてるって、

少しくらい頭を冷やしてみるのも必要だ

よ」

莢夏「本当に……いいの?」

優香「さっきからそう言ってるじゃん。仕

事も今、休職してるし、ちょうどいいわ」

笑い合う優香と莢夏。

莢夏、ふと真顔になり、

莢夏「本当にママに黙って行くの？」

優香「言って、あの人が許すと思う？」

首を振る莢夏。

優香「ちゃんと電話入れるから大丈夫だよ。

まあ、でも……」

莢夏「何？」

優香「そんなに怒られもしいと思うよ」

莢夏「どうして？」

優香「あの人も歳とったってこと」

莢夏「（複雑な表情を浮かべ）まあ、そうだ

ね……まあ、そっか」

優香「莢ちゃん、どっか行きたいところある？」

莢夏「……函館」

優香「函館？ 何でまた」

莢夏「……本で見て、夜景綺麗だったから」

優香「ふうん、いいよ。新幹線と飛行機、

どっちがいい？」

莢夏「新幹線」

優香「荷造りしておいてね」

莢夏「うん」

○同 優香の部屋

大きなリュックを背負っている莢夏。

莢夏の肩からリュックを外し、中身

をチェックする優香。中には、かり

んとうやポッキーなどのお菓子がぎ

ゅうぎゆうに詰まっている。

優香「遠足かよっ。着替えとか歯磨きセツ

トとか入れないとだめでしょうが」

莢夏「お腹すくじゃん」

優香「お菓子なんて、どこでも買えるの」

莢夏、リュックの中身を名残惜しうに出していく。

莢夏「先生、ポッキーと冷凍みかんは定番

であります」

優香「まあ、いつか」

莢夏、嬉しそうに荷造りを続ける。

優香「莢ちゃん、ちよっと、目、つぶって」

目を閉じる莢夏。莢夏の胸元にペンダントをつける優香。莢夏、目を開け、ペンダントを手取る。菱形で青と白の石がはめ込まれている。

優香「遅れてた誕生日プレゼント。旅行に

は、アクセサリーくらいつけなきゃ」

莢夏「ありがとう」

鏡の前に立ち、ペンダントに嬉しそうに触れる莢夏。

○東京駅 外観

○同 新幹線 ホーム

スーツケースを引いて歩く優香。

リュックを背負い、落ち着きなくきよろきよろと周囲を見渡す莢夏。

莢夏の胸元には、優香が送ったペンダントが光っている。

莢夏「人、いっぱい。テレビで見たのと一緒」
優香「こら、変な人だと思われるじゃんか」

莢夏に新幹線の切符を渡す優香。

莢夏、切符を嬉しそうに見つめる。

○走行中の新幹線 車内

窓際の席で両手をべったりと窓につけ、景色を見つめる莢夏。駅弁をテーブルの上に乗せる優香。

莢夏「うおお、速い、速い」

優香「お弁当、食べよう」

目を輝かせ、駅弁のパッケージを見つめる莢夏。

莢夏「駅弁、初めて」

蓋を開け、中身を見てにやにやする莢夏。そんな莢夏を見て、微笑む優香。

○新函館北斗駅 外観

○同 ホーム

駅の中を楽しげに見渡す優香と莢夏。

優香「莢ちゃんが予約してくれたところ、ここから遠いの？」

紙を取り出す莢夏。PCからプリンアウトされた紙に、『ロシア料理店 ペトルーシユカ』と印字されている。

莢夏「近いよ。ここ、オーベルジュなの」

優香「一階がレストランで二階が客室なんだよね。荷物置きたいけど、まだ午前中だから、無理かなあ」

莢夏「十一時からチェックインできるみたい」

優香「本当？　じゃあ、先に荷物置こうか」

莢夏「ボルシチ食べたいな」

○ロシア料理店 ペトルーシユカ 外観

『ペトルーシユカ』と書かれた看板を

指差す優香。

優香「ここだよね」

赤く塗装された木製の扉を開ける優香。

○同 一階 レストラン

赤を基調とした色調の温かみのある店内。カウンターの中から、葉山亮平(35)が優香と莢夏に頬笑みかける。

葉山「いらっしやいませ」

優香「すみません、予約した片桐と申します」

葉山「ご宿泊の方ですね？ お待ちして이었습니다」

優香「チェックインさせて頂いてもいいですか？」

葉山「はい、どうぞ。こちらにお名前とご

住所をご記入いただけますか」

優香のスマホの着信音が鳴る。

優香「ごめん、ちょっと」

店の外に出ていく優香。葉山から差し出された用紙を見つめる莢夏。

× × ×

店の中に戻ってくる優香。

優香「失礼しました」

用紙を見て、目を見開く優香。

氏名の欄に『片桐優香 片桐ドリー』と記入されている。

莢夏「書いといた」

葉山「(用紙を手に取り)外国の方ですか？」

莢夏「ハーフなんです」

葉山「お姉さんは日本のお名前なんです」

莢夏「腹違いなんです」

あつけにとられ、莢夏を見つめる優香。

葉山「では、鍵をご用意しますね」

隣室に移動する葉山。

優香「（小声で）ねえ、ドリーってまさか」

莢夏「（小声で）そうよ、世界最初のクロー

ンの羊のドリー」

優香「……悪趣味」

莢夏「私たちの親ほどでもないよ」

戻ってくる葉山。

葉山「どうぞ、ご案内いたします」

優香のスーツケースを持ち、優香と

莢夏を奥の階段に誘導する葉山。

○同 階段

葉山の後について、階段を上って

く優香と莢夏。

優香「（小声で）面白いお店ね。どうやって、

見つけたの？」

莢夏「ネットだよ」

葉山「客室は二階なんです。二部屋しかなくて、今は片桐様だけなんですよ」

○同 二階 二〇一室

赤と茶色で統一された、簡素だが、温かみがあり、清潔感がある部屋である。

葉山「何か、ありましたら、内線でお電話

ください」

優香「ありがとうございます」

壁の時計は十一時を差している。

莢夏「あの、レストランって何時からやっ

てるんですか？」

葉山「食事もよかったら、どうぞ。ご宿泊のお客様には、開店前でもお食事ご用意できますので」

優香「そうする？」

莢夏「うん」

○同 一階 レストラン

カウンター席に座る優香と莢夏。

優香と莢夏にメニューを渡す葉山。

優香「すみません、オーブン前なのに」

葉山「いえいえ、メニューはちよつと限られちゃうんですけど。煮込み料理なら、すぐにお出しできますよ」

メニューをじつと見つめる莢夏。

莢夏「ボルシチセット、お願いします」

優香「私もそれで」

葉山「はい」

メニューを受け取り、厨房に入っていく葉山。店の中を見渡す優香と莢夏。

マトリョーシカやチェブラーシカの置物や『白鳥の湖』の舞台の写真などが飾られている。

優香「ロシア料理のお店に入ったの、初めて」

莢夏「雑貨、買えるのもあるんだよ」

レジ横の台の上には、ポストカードや絵本、小型の動物のマトリョーシカなどが置かれている。

優香「可愛い。お土産に買って帰ろうね」

× × ×

優香と莢夏のテーブルにボルシチと

パンとサラダが並んでいる。

優香「おいしそう、いただきます」

莢夏「いただきます」

ボルシチを口に入れる優香と莢夏。

莢夏「おいしい」

優香「おいしいです、すごく」

葉山「夜はもっと、メニューが増えるんで、

よかったらどうぞ」

優香「函館って、ロシアのお店、色々あり

ますよね」

葉山「そうですね、函館はロシアと縁が深

いし。ロシアの学校もありますから」

優香「へえ、面白い。（壁の写真を指差し）

ご夫婦でお店をされてるんですか？」

○写真（五年前）

店の前で、葉山亮平（30）と葉山雪

絵（25）、葉山鉦太（5）が並んで微

笑んでいる。

○ペトルーシカ 一階 レストラン

写真を見ている優香と莢夏と葉山。

葉山「妻が元々、函館の生まれで、育った

のは東京なんですけど。故郷の函館で店

を開くのが夢だったんです」

優香「素敵な奥様ですね」

葉山「ありがとうございます。二年前に癌

で亡くなってしまつて」

優香「……そうだったんですか」

葉山「元々、子供の頃から身体が弱くて、

入退院を繰り返してたんですけど、どう

しても、大人になったら、雑貨屋をやり
たいって頑張ってたんです」

優香「素敵なお店です、とっても」

葉山「元々、妻は手作りの雑貨の店がやり
たいって言うてて。でも、僕はロシア料
理の店をやりたくて、じゃあ、レストラ
ンに雑貨を置けばいいじゃん、って話に
なって」

莢夏「このお店のホームページ、見ました。
ブログで奥様の写真も拝見しました」

葉山「そうだったんですか」

莢夏「来られてとても嬉しいです」

葉山「ありがとうございます」

どこか莢夏の発言に違和感を感じ、
莢夏を見つめる優香。優香の視線に
気づきながらも、無視する莢夏。

葉山「これから、観光ですか？」

優香「はい、ガイドブック見ながら、色々、
相談してて」

葉山、優香と莢夏にフライヤーを差
しだす。『ロシア市』と印字されてい
るフライヤー。

葉山「今日、商店街でロシア市があるんです。

夕方から、うちの店も屋台出すんですよ。

イベントもやるのでよかったら」

優香「(莢夏に) 行ってみる？」

莢夏「うん」

○同 二階 廊下

スマホを耳に当てている優香。

美恵の声「……優ちゃん、今、どこ？」

優香「北海道」

美恵の声「(ため息) あの子も一緒？」

優香「うん、私が誘って、出てきたの」

美恵の声「あなた、こんなことする子だとは思わなかったわ」

優香「本当いうと、ずっと前から考えてたの。

もう、お父さんも家にいないし……これでも、ママに遠慮してたの」

○片桐家 リビング

受話器を耳に当てている美恵。

美恵「お父さんは怒ったでしょうね あなたきつと、死ぬほど怒られたわよ」

○ペトルーシユカ 二階 廊下

スマホを耳に当てている優香。

優香「……そうね、でも、もう、あの人は

無力よ。それに、ママも本当は、そんなにシヨックでもないんでしょ」

美恵の声「そうね、もう、今更、秘密を守ろうとキリキリするのも疲れたわ。あなたのことだから、上手くやってくれるんでしょ。何かあったとしても、あの子を病院に連れて行こうなんて考えないでちようだいね」

優香「……大丈夫、無理はさせない。薬もたくさん、持ってきたし」

美恵の声「人前でおかしなことしたら、あなたが責任持って、止めるのよ」

優香「……分かった。明日また、連絡する」

電話を切る優香。

○同 二階 二〇一号室

中に入る優香。莢夏、落ち着きなく、部屋の中を歩きまわっている。

莢夏「ママ、何て言ってた？」

優香「……莢ちゃんのこと、心配してたよ。

無理しないでねって」

莢夏「……怒ってなかった？」

優香「……大丈夫だったよ。こつちのこと

は心配しないでって」

莢夏「そっか、よかった」

安堵した様子で笑う莢夏。

作り笑いで応える優香。

○商店街 メインストリート 入口

入口にロシアの国旗が飾られている。

多くの客や屋台で賑わっている。案

内図を見つつ、楽しみに歩く優香と莢夏。

優香「あ、葉山さん」

『ペトルーシュカ』と書かれた看板の屋台の中で、葉山が大きな鍋を煮込んでいる。

優香「すごい人ですね」

葉山「年に二回あって、いつも結構、にぎわうんですよ」

優香「(莢夏に) 何か頼もうか？」

莢夏「うん、じゃあ、ボルシチください」

葉山「(笑って) さっきもお店で食べたのに」

莢夏「ボルシチがいいんです」

優香「私はピロシキがいいです」

男の子の声「父さん、俺もピロシキ食べたい」

葉山の後ろから、葉山鉦太(10)が

顔を出す。

鉦太「もう、手伝いはいいでしょ」

葉山「いいよ、イベント見たいんだろ」

ボルシチとピロシキを優香と莢夏に
手渡す葉山。

葉山「あ、うちの息子です」

鉦太「葉山鉦太です」

優香・莢夏「はじめまして」

葉山「よかったら、うちの息子に案内させ
ますよ」

鉦太「別にいいけど」

優香「イベント会場、一緒に行っていない？」

鉦太「ピロシキ、食べてからね」

葉山からピロシキを受け取る鉦太。

× × ×

歩いている優香、莢夏、鉦太。

飲食の屋台や雑貨や服を売る出店な
どが混在し、にぎわっている。

優香「色んなお店があるのね」

鉦太「近くの大学とかも店、出してるから」
莢夏「あ、あれ、何かな？」

台の上に洋楽や邦楽の様々なジャン
ルのCDが並べられている露店を指
差す莢夏。莢夏に微笑みかける女性
店員。

女性店員「中古のCDです。お安くします
よ」

一枚のCDを手に取る莢夏。CDの
表面には、水の上で羽ばたく白鳥の
写真。

莢夏「『白鳥』をテーマにした楽曲集だって」

CDの裏面の曲のリストを熱心に見

つめる莢夏。

優香「それ、欲しいの？」

莢夏「うん」

優香「買ってあげるよ。これ、ください」

店員に代金を払う優香。

莢夏「私、ネット以外で買い物って初めて」

優香「そっか」

莢夏「ありがとう」

CDを渡され、うれしそうに笑う莢

夏。

○広場 噴水前（夕）

軽快な音楽が鳴り響き、三十人ほど

の人が集まり歓声をあげている。若

い男性がバルーンアートを披露して

いる。

鉦太「あそこで大道芸やってるよ」

優香「プロのステージなの？」

鉦太「ううん、素人ばっか」

莢夏「私も出てもいいの？」

優香「でも、私達、申し込みとかしてないし」

鉦太「飛び入りでも参加できるよ」

莢夏「じゃあ、出たい」

優香「……莢ちゃん、出来るの？」

莢夏「私、上手なんだから」

優香「この間、失敗して、ママをキレさせ

たくせに」

鉦太「参加するなら、エントリーしに行こう」

運営のテントを指差す鉦太。

優香「……え、待って、莢ちゃん」

莢夏「大丈夫、記録とかつかないやつだから」

テントに向かって歩いていく莢夏。

不安げに莢夏の後ろ姿を見つめる優香。

× × ×

カードマジックを披露している男性のステージを見ている優香と鉦太。

鉦太「あの人の次だつて」

男性の出番が終わり、拍手する観客達。

不安げに両手を握りしめる優香。

莢夏が観客の前に登場し、礼をする。

優香「莢ちゃん」

指を鳴らす莢夏。莢夏の右手の掌の上に炎が現れる。炎を火の玉のように右手から左手に素早く移動させ、繰り返し、往復させる莢夏。両手を同時にぐっと握りしめ、両の掌を観

客に見せる莢夏。火は完全に消え、火傷もなく、綺麗な掌である。沸き

上がる歓声。

鉦太「すげえ」

続いて、リュックから、バストサイズの絵を取り出す莢夏。十枚の紅葉の葉が描かれた絵である。指を鳴らす莢夏。絵の紅葉の葉の一枚が燃える。再び指を鳴らす莢夏。次々と紅葉の葉が燃えていく。沸き上がる歓声。絵の前を布で覆う莢夏。

鉦太「全部、燃えちゃうじゃん」

布を外す莢夏。火は完全に消えて、十枚の紅葉の葉が描かれた絵が再び現れる。歓声が沸き上がり、おしみなく拍手を送る観客達。

鉦太「すげえ、めっちゃすげえ」

誇らしげに莢夏に拍手を送る優香。

○ペトルーシユカ 二階 二〇二号室

ベッドに寝転がる莢夏。莢夏の隣に
腰掛ける優香。

○商店街 メインストリート（夕）

歩いている優香、莢夏、鉦太。

鉦太「（興奮気味に）ねえ、どうやったの？」

どうして、燃えなかったの？」

莢夏「内緒」

鉦太「何か薬品使ったの？ 俺にもでき

る？」

莢夏「だから、ネタばれしたら、つまんな

くなるんだって」

鉦太「ちえ、ネットで検索してやる」

莢夏「聞いた？ 最近の子供は可愛くない

ね」

優香「あんたに言われたくないでしょうよ」

優香「本当にびっくりしたよ、莢ちゃん」

莢夏「（笑う）」

優香「何で、手品のグッズ持ってたの？」

莢夏「事前に調べてたんだもん。この大道

芸のステージのことも知ってたよ、もち

ろん」

優香「え、じゃあ」

莢夏「出発する前から、出場するつもりだ

ったってこと」

優香「……呆れた。でも、何か、意外」

莢夏「何が？」

優香「いや、莢ちゃんさ、外、出たの、初

めてなのに、堂々としてるよね。人前で

あんなことしちゃうし」

莢夏「ふふ、まあね、でも、これでも、今日はすごい緊張したんだよ」

ベッドに倒れ込む莢夏。

莢夏「今日、生まれてから一番、楽しかった。

で、一番、疲れた。これ、夢じゃないよね？」

優香「……明日は、朝、ゆっくりにしようか」

頷き、目を閉じる莢夏。

莢夏「優ちゃん、派手なことすんのかって、

目立つのって気持ちいいーね」

優香「(笑う)」

○莢夏の夢

長い廊下を裸足で歩いている莢夏。

反対側から歩いてくる長い髪の女らしき人影が見える。立ち止まる莢夏。

人影がどんどん莢夏に近づいていく。莢夏、人影から逃げようとするも、足が動かない。莢夏の目の前で立ち止まる女。女は莢夏と同じ顔をしている。女の胸には、十字架のネックレスが光っている。女に背を向け、逃げだす莢夏。女は莢夏の後ろ姿をじっと見ている。莢夏、息を切らして全力で走るが、力尽きて転ぶ。起き上がろうとするも立ち上がれない莢夏。目線の先に大きな鏡がある。その鏡の中で、莢夏と同じ顔をした女が莢夏を見下している。鏡の中で、女の背後には、川が流れており、無数の白鳥が川のほとりに降り立つ。莢夏に背を向けて、川の方へ歩いて

いく女。

莢夏「待って」

女の方に手を伸ばす莢夏。女の後ろ姿を無数の白鳥が覆い隠していく。

（夢終わり）

○元の部屋 二〇一号室

うなされている莢夏。莢夏の肩を揺らす優香。

優香「莢ちゃん、莢ちゃん」

目を覚ます莢夏。電気を点ける優香。

優香「うなされてたよ、大丈夫？」

莢夏「嫌な夢を見たの」

優香「疲れたんじゃない？ 明日は部屋の

中でゆっくり寝ていいんだよ」

莢夏「大丈夫、嫌な夢見るの、慣れてるから」

布団を頭までかぶる莢夏。莢夏の身体を布団の上からそっとさする優香。

莢夏「さっきの夢に『莢夏』出て来たよ」

優香「え？」

莢夏「さっきっていうか、いつも」

優香「……そうだったの」

莢夏「『莢夏』は両親に愛されてたいい子だったね」

優香「……うん」

莢夏「絵が上手で、家の中は綺麗な風景画がいっぱい。パパもママも嬉しそうに私に『莢夏』の絵を見せた」

優香「……そうだったね。ねえ、手品で使った、あの紅葉の絵って」

莢夏「『莢夏』の描いた絵だよ。パソコンでスキャンしたの」

優香「……やっぱり」

莢夏「私、不器用だし、短気だし、絵は全然だめだった」

優香「莢ちゃんの手品、上手じゃない」

莢夏「でも、ママは私に絵の才能があるはずって信じてた……『莢夏』と同じような」

優香「……」

莢夏「ママがつきつきりで絵の描き方、教えてきて。私は『莢夏』の描いた絵と同じような絵を描こうとしたけど、全然、駄目で」

優香「……確かにあの時のママ、莢ちゃんに一日中はりついてて、うざかったね」

莢夏「私、もう、やだって言って、キャンバスを真っ黒に塗りつぶしたの」

優香「それで、いいよ。やりたくないこと

を無理にやる必要なんてないもの」

莢夏「でも、ママは得体のしれないものを見るような目で私を見てた」

薄く笑って、優香を見る莢夏。

優香、思わず、莢夏から目を逸らす。

優香「……あなたは私の姉とは違う人間だよ」

莢夏「……」

優香「聞き飽きただろうけど、姉とは、一卵性の双子以上に似ることはないんだよ」

莢夏「……少し、眠くなってきた」

目を閉じる莢夏。

優香「しんどくなったら、ちゃんと行ってよ」

莢夏「うん、分かってる」

部屋の電気を消す優香。

○同 一階 レストラン

階段を下り、レストランに入る優香と莢夏。優香と莢夏を見て、微笑む葉山。

葉山「おはようございます。昨日、すごく

盛り上がったって息子から聞きました」

優香「おはようございます。ロシア市、行ってよかったです。ありがとうございますました」

レジ横に飾られているピエロの格好の人形を指差す莢夏。

莢夏「この人形……」

葉山「ペトルーシユカです」

優香「このお店の名前って、ロシアの有名なバレエの曲ですよね？」

葉山「ええ、店の名前、妻がつけたんです。

おがくずを詰め込まれた人形の話でしょ。病気で自分の身体を呪ったことがある自分分は、ペトルーシユカの気持ちが分かる気がするって」

優香「姉も生きてたら、きっと……」

葉山「え？」

優香「……いえ、何でもないです」

人形の顔を指先でつつく莢夏。

○同・二階 二〇一室

莢夏の脈を測っている優香。

莢夏「薬も効いてるし、出かけても大丈夫よ」

莢夏から手を話す優香。

優香「いいよ」

表紙に『莢夏』と書かれたノートを開き、数値を書き込む優香。ノート

には、日付と共に、脈拍、体温、血圧などの数値が細かく書き込まれている。

優香「痛みどめは？ 今日はず気？」

莢夏「大丈夫」

ピルケースから、五種類の錠剤を出し、莢夏の掌の上に乗せる優香。

優香「それ、飲んで、もう少し、休んで。それで、まだ外に出る元気があったら、連れて行ってあげるから」

ベッドの上に横たわる莢夏。

莢夏「『莢夏』もきつと、ペトルーシユカの気持ちがかかったんじゃないかな」

優香「え？」

莢夏「病気で死んじゃった方の『莢夏』」

優香「……」

莢夏「ねえ、優ちゃん、『トウオネラの白鳥』って知ってる？」

優香「シベリウスでしょ」

莢夏「そう、その白鳥はね、トウオネラっていう黄泉の国に流れる川に棲んでるの」

優香「……うん、悲しげな曲だよ」

莢夏「昨日、ボルシチ食べてる時に思い出したんだけどね」

優香「うん」

莢夏「私ね、十年くらい前に、ドキュメンタリー番組を見てて、世界の子供たち、みたいなタイトルで」

優香「うん」

莢夏「その特集で、ロシアの子が出てきたんだけど、その子はね、親に捨てられて、家がなくて、土管の中で、暖をとって、

犬と一緒に暮らしてたの」

優香「うん」

莢夏「なのに、すごくたくさん、笑う子だったのを覚えてる」

優香「……」

莢夏「私、その子とすごく友達になりたかったの。学校のクラスの子達よりもその子と友達になりたかったの」

優香「……クラスの子？ 学校？」

莢夏「健康で、明るく楽しく生きてるクラスの子達よりも、ずっと、身近に感じたの。」

テレビの中の人なのにな」

優香「……莢ちゃん、何、言ってるの？」

莢夏「あれ？ 私は学校行ってなかったわけ」

優香「……おかしいよ、莢ちゃん、それは

あなたのことじゃない」

莢夏「学校に行ってたのは、クローンじゃなくて、本物の方の『莢夏』か」

優香「……寝なよ、今日はここで、ゆっくり休んで、明日またおいしいもの食べよう」

ゆっくりと目を閉じる莢夏。

首を振り、口元を押さえる優香。

優香「……莢ちゃん」

○同 二階 廊下

スマホを耳に当てている優香。

優香「……こっちは問題ないから、大丈夫」
美恵の声「そう、それはよかったわね」

優香「ママこそ大丈夫？ 莢ちゃんもいないことだし、ゆっくり大きな病院とかで

検査してもらったら？」

美恵の声「それもいいわね。それよりも聞いてちょうだい。私ね、お父さんと同じ系列のホームに入ろうかなって思ってるの」

優香「はあ？」

○片桐家 リビング

受話器を耳に当てている美恵。

美恵「六〇歳になったら、入居しようと思っ
て。あなたのおかげで一人でゆっくり
と自分のことを考える時間ができてね。
人気の施設だから、早く契約したいの」

○ペトルーシカ 二階 廊下

スマホを耳に当てている優香。

優香「……あの家を出るってこと？」

美恵の声「お父さんのコネで何人か飛ばし
て入れてくれるって」

優香「……莢ちゃんは？」

美恵の声「優ちゃん、あなたがいるでしょ。
お金なら、出してあげるから。あの子の
面倒見てあげて」

優香「……ママ」

美恵の声「あの子、私よりもあなたに懐い
てるみたいだし」

頭に手を当てて、息を吸って吐く優
香。

優香「……ママ、あなたにとって、莢ちゃ
んって何？」

美恵の声「天使よ。天使だから、人間の生
活は合わなかったのね、きつと」

電話が切れる音。

茫然とスマホを見つめる優香。

○同 二階 二〇一室

中に入る優香。

莢夏がベッドに腰かけている。

莢夏「ママ、どうしてた？ 体調とか悪くなってるない？」

優香「……大丈夫、元気だった」

莢夏「そっか、よかった」

優香に笑いかける莢夏。

優香、莢夏の頭を撫でる。

莢夏「どうしたの？」

優香「……楽しい旅行にしようね」

莢夏「うん」

優香、泣き出しそうになるのをこら

え、莢夏に笑いかける。

○同 一階 レストラン

時計は午後五時半をさしている。

カウンター席に座っている優香と莢

夏。

葉山「今日は外、出なかったんですね」

優香「はい、疲れて寝ちゃいました」

葉山「函館は街がコンパクトにまとまっ

るから、ゆっくり観光できますよ」

優香「葉山さんは、函館出身なんですか？」

葉山「はい、生まれも育ちも函館で、妻と

も函館で知り合って」

優香「奥様は、子供の頃は東京だったんで

すよね」

葉山「そうそう、でも、入院がちだったから、

学校よりも病院の方が思い出があるって
言っていました」

優香「そうなんですか」

葉山「何かね、入院してた時、悪さも色々、
してたみたいで、隣のベッドの子と共謀
して、お医者さんのカッラをね、とった
って言うんです」

優香「……お医者さんのカッラ？」

葉山「そうそう、でも、隣の子は大人達か
らしい子って思われてたから、私がその
子をそそのかしたみたいに言われたって、
笑ってました」

優香「……奥様、病院も東京だったんです
か？」

葉山「はい、秀英大学付属病院の小児病棟に」
優香「……あの、奥様のお名前、教えてい

ただいて、いいですか」

葉山「葉山雪絵です。旧姓は三島雪絵。雪
まつりの雪に絵具の絵。もしかして、知
り合いとか？」

店のベルが鳴り、二人組の女性客が
中に入ってくる。

葉山「いらっしやいませ」

頭を下げ、女性客を案内する葉山。

莢夏を見つめる優香。

莢夏、優香の目線に気づきながらも、
無視して、紅茶を飲んでいる。

○同 二階 二〇一号室

ベッドに腰かけている莢夏を見下す
優香。

優香「このお店、お姉ちゃんの友達のお店っ

て知ってて、ここに来たいって言ったの？」

莢夏「そうよ」

優香「……どうして、莢ちゃんがお姉ちゃんのいた病院の……隣のベッドにいた女の子のことを知ってるの？」

莢夏「調べたから」

優香「どうして？ どうやって？」

莢夏「コピーが原本のこと知りたいと思って、何が悪いの」

優香「どうして、いつもそういう言い方

……」

莢夏「優ちゃんは、悪夢見たことある？」

優香「そりゃあるよ」

莢夏「夢から覚めるまで、いっそ死んでしまったほうがましだって、思うくらい

の？」

優香「……それは、ないと思う」

莢夏「私はしょっちゅう見てたわよ」

優香「……お姉ちゃんの夢なの？」

莢夏「初めて、見たのは、一三歳くらいだったかな……何か、生理が始まったと同じくらいの時期だったのは覚えてる」

優香「……」

莢夏「嫌な夢。本当に眠りたくないときえ、思う。私と同じ顔をした女に責められる夢。何度も何度も」

優香「……何で、今まで黙ってたの」

莢夏「……あんただったら、家族に言える？」

優香「（言葉に詰まる）」

莢夏「ホラーよね、ていうか、私の存在自体がホラーだわ」

優香「……莢ちゃんが、その頃から、いら

いらしてたのってそのせい？」

莢夏「……ずっと、何に怒ればいいか、分かんなかった。私がいらつけばいらつくほど、家族はバラバラになって……でも、自分の感情を抑えられなかった」

優香「それは、あなたのせいじゃない。みんな弱かったの……私も含めて」

莢夏「でも、その弱さはきつと、私のせいでもあるの」

優香「……そんなこと」

莢夏「そうなの」

優香「……ちゃんと、話して」

莢夏「真っ白なベッドの上で苦しくて、のたうち回ってる時に、必死に励ましてくれる女の子がいたの。あ、夢の話ね」

優香「……」

莢夏「繰り返し夢の中に出てきた子、どこかで見たことがあるような気がした。それが分かったのは、ママが『鑑賞会』の後でアルバムを見せてくれた時。そのアルバムの中で『莢夏』と写ってる女の子は、何度も何度も夢の中で私を助けようとしてくれた」

優香「……それって」

莢夏「ママからその子が『三島雪絵』って名前で『莢夏』と同じ部屋で隣のベッドだったことを教えてもらった。私、『三島雪絵』って名前をメモして、会えるわけないって思いながらも、たまに『三島雪絵』って、ネットで検索したら、四年前に雪絵さんのフェイスブックを見つけたの。」

そこで、雪絵さんが函館でお店をしてる
ってことを知った。それで、お店のブロ
グにメッセーじを書きこんだの。『片桐莢
夏の親族の者です』って」

優香「……雪絵さん、何て？」

莢夏「雪絵さんは、すぐに返事をくれた。私、
ずっと雪絵さんとチャットで会話してた
の」

優香「……じゃあ、ずっと知り合いだったの」
莢夏「そう、だから、今回、優ちゃんが旅
行に誘ってくれた時、どうしても、雪絵
さんのお店に行きたいと思った」

優香「……どうして、旅行の前、お姉ちゃ
んの友達のお店に行きたいって言って
くれなかったの？ 私が反対すると思っ
た？」

気まずそうに優香から目を逸らす莢
夏。

優香「何？ やましい事でもあるの？」

莢夏「……ごめん、喋りすぎて疲れた」
ベッドに倒れ込む莢夏。枕に顔を埋
める莢夏をじっと見つめる優香。

○同 一階 レストラン

カウンター席でコーヒーを飲む優香。
優香にカウンター越しに紙袋を差し
だす葉山。

葉山「これ、食欲戻ったら、妹さんに」

袋をのぞく優香。黒パンが入ってい
る。

優香「ありがとうございます」

葉山「すみません、今日、店が定休日だから、

こんなものしか出せなくて」

優香「いえ、十分です」

葉山「昨日は外に出られなくて残念でしたね」

優香「いえ、いいんです。ゆったり観光しようと思つてたので」

葉山「函館はおいしいものが多いから、食べないともつたいないですよ」

優香「そうですね、このお店のご飯も本当においしいし」

葉山「（苦笑し）息子には、母さんの料理の方がおいしかったって言われてますけどね」

優香「素敵な方だったんですね。実は私、子供の頃、奥さんに会ったことがあるんです」

葉山「（驚いて）そうなんですか？」

優香「はい、病院で姉と仲良くしていただいたんです」

葉山「……じゃあ、入院時代の」

優香「私は姉のお見舞いに行った時、挨拶くらいしかしてなかったんですけれど、優しいお姉さんだったなあって」

葉山「お姉さんは、今は……」

優香「亡くなりました。十歳で。生きてたら、三十歳です」

葉山「……そうですか。雪絵と同じ歳ですね」
優香「どうして、ロシア料理のお店にしようと思われたんでしょうか」

葉山「僕のね、祖母がロシアの人だったんです。僕が九歳の時に亡くなったんですけど、ロシアの料理をいっぱい作って、

食べさせてくれて、その味が忘れられなくて」

優香「そうなんですか」

葉山「……いつか、家族で行って見たかったですけど」

葉山、雪絵、鉦太が映っている写真を見つめる優香。

○同 二階 二〇一号室

聴診器で莢夏の胸の音を聴く優香。

優香「いいよ」

ブラウスのボタンを閉じる莢夏。

優香「本当にご飯、いらないの？」

莢夏「うん、食べたくない。優ちゃんは、ちゃんと、食べた？」

優香「うん、食べながら、葉山さんと話し

てた。あの人、本当に愛妻家だね。夫婦でお店やるっていいなあ」

莢夏「優ちゃんは彼氏、いるの？」

優香「今はいないよ」

莢夏「もう、いい年じゃん。彼氏いないんだったら、婚活しちゃえ」

優香「苦笑し」結婚は無理だよ」

莢夏「何で？」

優香「莢ちゃんのこと、どう説明すんの？」
はっとした表情の莢夏。

莢夏「あー、そっか、そういや、そうだな」

優香「（口を押さえ）……ごめん」

莢夏「（自嘲気味に笑い）私、常識ないから、そういうの、分かんないんだな……」

優香「……今のなし、忘れて」

莢夏「本当のことでしょ」

優香「（明るく）いいの、私、結婚とか、そ

ういうのこだわらない彼氏、作るし」

莢夏「……子供は？ 諦めるの？」

優香「諦めるも何も、子供なんて、私、元
から欲しくないし」

莢夏「……大変だね、優ちゃん。人ごとも
たいなさ、感想で申し訳ないけど、大変
だね、優ちゃん」

優香「（笑って）何よ、それ」

莢夏「いらないうて言えはいいのに」

優香「え？」

莢夏「（自分を指差し）あんだ、いらないう
て言えは？」

優香「（動揺して）そんなわけ、ないじゃん」

莢夏「私もそう思うもの。私、いらない」

優香「莢ちゃん……何言ってるの？ 死に

たいとか、そういうこと？」

莢夏「死にたいとかじゃないな……上手く
説明できないけど、なんか、ゲームみた
いにさ、リセットボタン押して、始めか
らなかったことに、みたいな」

優香「何、それ。そんなん、言ってもどう
しようもないこと……」

莢夏「うん、だから、今まで言えなかった」

優香「……ごめん」

莢夏「何で謝るの？」

優香「もっと、そういう……莢ちゃんの辛
い事とか苦しい事の話、しとくべきだっ
た」

莢夏「そう、だから、私、話聞いてほしか
ったから、私、雪絵さんのチャットで
話しちゃった。『私、片桐莢夏のクローン

人間なんです』って」

優香「……冗談でしょ」

莢夏「冗談のように見える？」

優香「……嘘」

莢夏「誰にも言わないって約束してくれた

よ。実際、旦那さんにも話してないと思う」

優香「（大声で）いくら、家の中で自由にし

ていいからって、やっていいことと悪い

ことがあるでしょ！」

莢夏「ああ、やっぱり、いざという時はあ

んな親でもかばうんだ」

優香「そういうんじゃないくて……世間には

れたら、莢ちゃん、あなたが一番傷つ

くことになるんだよ」

莢夏「（吐き捨てるように）どうでもいいよ、

そんなの」

優香「……最近、仕事が忙しくて、あんまり、

構えなくなってる、悪かったと思ってる」

莢夏「（鼻で笑い）あんたは、楽、してるじ

やないか」

優香「は？」

莢夏「毎日、学校行つて、卒業したら、仕

事して、そうしてれば、一日が終わる。

こんな楽なことってない」

優香「……外の世界がどれだけ厳しいか、

引きこもりのあんたなんかに分かるもん

か」

莢夏「引きこもりかあ、ライトな言葉だよ

ねえ。はつきり、いいなよ。お前は終身

刑の囚人だって。お前のいる場所はちょ

っと、待遇のいい、刑務所と同じだって」

優香「……ちよっと、待つてよ。ねえ、待つて。

それでもね、パパもママも……私だって、

あなたを守ろうとしてたの」

莢夏「笑って」 看守様は高見の見物で囚人の機嫌を取って……いい気なもんね」

優香「（大声で）あんたのせいでどれだけのくさんのことを我慢してきたと思ってるの」

莢夏「……」

優香「……うんざり」

莢夏「やっと、言えたじゃない」

はっとして、莢夏を見つめる優香。

莢夏「本音、言えたじゃない」

優香「違うの」

莢夏「違わない」

優香「（首を何度も振って）違う、違うの」

莢夏「ごめんね、ちょっと、お店見てくる」

出ていく莢夏。

○同 店前 道路

店の周りをうろうろとうろつく莢夏。

車のエンジン音。運転席の葉山、駐車場から路上にワゴン車を出す。莢夏に気づき、車の窓を開け、

葉山「体調、大丈夫ですか？」

莢夏「はい、これから、どこか行くんですか？」

葉山「ええ、今日は店、休みなので、今から、元町に買い出しに行くんです」

莢夏「あの……申し訳、ないんですけど、途中まで乗せて行ってもらっていいですか？」

葉山「いいですけど、お姉さんには言っ

あります？」

莢夏「……はい」

助手席の扉を開ける葉山。

葉山「どうぞ、乗ってください」

○走行中の車内

運転している葉山。助手席に座る莢

夏。

車窓から函館の街並みを見つめる莢

夏。

莢夏「一階は和風なのに、二階は洋風にな

ってる」

葉山「そうそう、函館は北海道の入り口だ

から、色んな国の人に来て、その名残です」

莢夏「色んな所から来た人を受け入れた街

なんですネ」

葉山「そうですね、僕達家族はみんな函館

大好きですよ」

莢夏「羨ましいです。実は、今、喧嘩してて」

葉山「そうなんですか。お姉さん、あなたのこと、すごく思いやって、心配してるように見えましたよ」

莢夏「そうなんです。いい子なんです……

いい子で、可愛くて……でも、時々、す

ごく憎らしい」

葉山「そうですか」

莢夏「優香は何でも持ってた、何にでもな

れるから」

葉山「うちの息子、言っていましたよ。美人

姉妹だって」

莢夏「(笑って) 本当ですか？」

葉山「僕もそう思います。あ、口説いてる

とかじゃなくて」

莢夏「(笑う)」

葉山「美人で手品も上手で、それって、『持

ってる』ことにならないですか?」

莢夏「……ありがとうございます」

窓の外を見つめる莢夏。窓には莢夏の顔が映っている。

莢夏「(呟くように) あなたもそうだった?」

葉山「え?」

莢夏「いえ、何でもないです」

○ペトルーシュカ 店前 道路

店の前でスマホの画面を見つめている優香。ランドセルを背負った鉦太が優香の元に駆け寄る。

鉦太「あ、優香さん、あのね、今、父さん

から電話があって、莢夏さんと一緒にいたんだけど、父さんがトイレに行ってる間にいなくなっちゃったんだって」

優香「……うん、今から、タクシー呼ぶよ」

鉦太「父さん、もうすぐ店の前に着くって、父さんの車で一緒に探そうよ」

店の前にワゴン車が止まる。優香の手を引く鉦太。車に乗り込む優香と鉦太。

○八幡坂

坂の上から街並みを見下す莢夏。

アイポッドを操作する莢夏。画面には『トウオネラの白鳥』の文字。イヤホンをする莢夏。『トウオネラの白鳥』の旋律が流れる。坂を下りて行

く莢夏。

莢夏N「優ちゃん、あなたは私をあなたの姉とは違う人間だと言いましたね」

ランドセルを背負った小学生の女の子三人が騒ぎながら、坂を下っていく。

莢夏N「でも、私はあなたの姉と同じであるように求められて、作られたのです」

坂を下りて行く莢夏。

莢夏N「別の人間でいいのなら、なぜ、私達の両親は、私を『莢夏』と名づけたのでしょうか」

坂を上ってくる若い男女とすれ違う莢夏。女性の胸には、十字架のネックレス。はっとして振り向く莢夏。女性は男性と笑いながら、坂を上つ

ていく。逃げるように坂を下りて行く莢夏。

○函館聖ヨハネ教会 外観

十字架を見つめる莢夏。莢夏、ハリストス正教会の屋根を見上げ、

莢夏「教会が三つもあるのか」

心臓の辺りをぎゅっと押さえ、入口の扉を見つめる莢夏。

○同 庭

ベンチに座っている莢夏。老女が来て、莢夏が座っているベンチを指差す。

老女「ここ、いいですか？」

莢夏「どうぞ、座ってください」

莢夏の隣に座る老女。

老女「礼拝はされました？」

莢夏「入れないんです、私」

老女「あら」

莢夏「一人でも入れたら、何か変わるかも
なってるけど……駄目でした」

庭の木製のブランコを見て微笑む莢

夏。

莢夏「でも、お庭を見れてよかったです」

庭の木々を見上げる莢夏。

莢夏「時々、木とか花とか……人間以外の
生き物になりたいなって思う時があつて」

老女「あら、そうなの」

莢夏「その場所から、動けないけど、たぶん、
植物は自分のことを不幸だなんて、思わ
ないでしょ。それに、あの木はみんなから、

いいね、綺麗だねって言ってもらえる」

老女「そうですね」

莢夏「私、他の人にとって、害にしかなら
ないから」

老女「私も植物になりたいと思ったこと、
ありましたよ」

莢夏「本当ですか？」

雀の鳴き声。雀が枝に止まっている。

莢夏「鳥もいいなあ」

老女「私も今なら、鳥がいいわねえ」

空を見上げる莢夏。

○走行中のワゴン車

運転している葉山。

後部座席に座っている優香と鉦太。

優香はスマホの画面を見つめている。

鉦太「莢夏さん、大丈夫かな」

優香「大丈夫、今、多分、自分で歩いてる」

葉山・鉦太「え？」

優香「あの子に内緒でGPSをつけてるの。」

私のスマホで位置が分かるようになって、今、予備校の前を通りすぎた」

× × ×

（カットバック）

道路を歩いている莢夏。胸元のひし型のペンダントがかすかに揺れる。

優香N「私達の両親はこうなることを恐れて、あの子が外に出ることを禁じたのだ」

× × ×

鉦太「（驚いて） どうして、莢夏さんに内緒で持たせてたの？」

優香「逃げだすんじゃないかって思ったか

ら」

葉山「……誰から？」

優香「私から……私達、家族から。だから、私、あの子に旅行しようって誘ったの」

優香の手からスマホが落ちる。

優香「あのままだったら、多分、あの子、近いうちに家出してたんじゃないかな」

スマホを拾おうと座席の下に手を伸ばす優香。

優香N「そう、あの家は父が施設に入り、母は心のバランスを崩し、私は自分の生活に手一杯になっていた。莢夏は孤独だった」

頭を上げられない優香。頬に涙が伝う。

優香N「家出か自殺。そのどちらかしかあ

の子には道はないだろうと思った」

鉦太「……優香さん？」

優香「私から離れちゃだめじゃないか」

頭を抱えて、嗚咽する優香。

○小学校 旧校舎 外観（夕）

○同 美術室（夕）

夕日が差し込む室内。白いキャンバスを見つめる莢夏。莢夏、ポケットから赤い絵の具を三本取り出し、自分の掌に赤い絵の具を塗りたくる。白いキャンバスに自分の掌を押しかける莢夏。白いキャンバスが手の形に赤く染まっていく。

莢夏N「私はいつか、罰が下る」

○同 旧校舎前 道路（夕）

肩で息をする莢夏。キャンバスは白い部分がほぼ無くなり、真っ赤に染まっている。莢夏の顔や服も赤い絵の具で汚れている。かすかに微笑む莢夏。

ワゴン車が止まる。運転席の葉山、後部座席の優香を振り返って、

葉山「ここで間違いないの？」

鉦太「ここ、もう使われてない旧校舎じゃん」

優香「はい、ありがとうございます」

ワゴン車を降りる優香。

優香「ここからは、私、一人で行きます」

葉山「俺達も一緒に行くよ」

優香「いえ、私一人で行かないと」

葉山「……」

優香「大丈夫です、帰りはタクシーで宿に帰りますから。本当にここまでありがとうございました」

頭を下げ、校舎の方に走っていく優香。

鉦太「お父さん、どうする？」

葉山「……雪絵だったら、どうしてたかな」

○同 旧校舎 廊下（夕）

荒廃した教室の一つ一つを覗き込む

優香。

優香「莢ちゃん」

廊下を歩きながら、涙ぐむ優香。

優香「お姉ちゃん」

ふいに何かを蹴飛ばし、何だろうと

拾い上げる優香。赤い絵具である。

目線の先には『美術室』の文字。

○同 美術室（夕）

教室の真中にキャンバスが置いてある。赤い絵の具の手形で真っ赤に染まったキャンバス。

優香「莢ちゃん？」

絵に触れる優香。指先に赤い絵具がつく。赤い絵具を握りしめる優香。

○同 グラウンド（夕）

校舎をにらみつけ、仁王立ちの優香。

優香、赤い絵具を掌の上に豪快に絞りだし、両手をこすり合わせる。真っ赤に染まった優香の両手。優香、

赤い絵具を地面に叩きつける。優香、校舎に向かって、すっと息を吸って吐き、

優香「（怒鳴り声で）莢夏あ！ 出てこい！

ふざけんな！」

優香の頬から涙がこぼれる。涙をぬぐおうとする優香。赤い絵具が優香の頬にべったりついてしまう。

優香「（怒鳴り声で）莢夏、莢夏、莢夏！」

叫び疲れて、肩で息をする優香。

莢夏の声「優ちゃん」

赤い絵具で汚れた顔の莢夏が優香にゆっくりと歩み寄っていく。莢夏、

優香の赤い絵具で汚れた顔を見て、

莢夏「ケガ、してるの？」

優香「馬鹿野郎」

莢夏を抱きしめ、子供のように泣きだす優香。優香に抱きしめられながら、優香の頭をなでる莢夏。

○同 旧校舎前 道路

並んで門を出る優香と莢夏。クラクシヨンの音。葉山のワゴン車が止まっている。葉山、赤い絵具がついた優香と莢夏を見て、

葉山「そんなんで、タクシー乗ったら、運転手さん、びっくりするでしょ」

優香・莢夏「（同時に頭を下げ）すみません」
鉦太「綺麗にハモったね」

○走行中の車内（夜）

運転している葉山。

助手席に座っている鉦太。

後部座席に座っている優香と莢夏。

葉山「まあ、俺はまんまと利用されたわけだ」

莢夏「（頭を下げ）……ごめんなさい」

葉山「まあ、無事でよかったよ。そういえば、

予約受けた時、宿泊は今日までになつて

たけど、明日、無事に帰れるの？」

鉦太「え？ 明日で帰っちゃうの？」

優香「はい、帰ります」

鉦太「あんまり、観光してないじゃん」

優香「いいんです……もう、観光どころじゃ

葉山「函館山は行った？」

優香「いいえ」

葉山「じゃあ、夜景も見えてないんだ。観光

客はみんな、行きたがるのに」

優香「いえ、もう十分です」

葉山「まあ、とりあえず、今日は早く帰っ

て休みなよ」

優香「……ありがとうございます」

○ペトルーシユカ 一階 レストラン

葉山と鉦太に深く頭を下げている優

香と莢夏。

優香「本当に今日はありがとうございますし

た」

葉山「ああ、もう、そんなに何回も頭、下

げなくていいから。いいよ、気にしないで」

頭を上げる優香と莢夏。

葉山、憔悴しきった二人の顔を見て、

葉山「明日、朝、早いのだめじゃなかったら、

函館山まで、車、出すけど」

優香「え？」

葉山「函館山って、俺は夜景よりも朝焼けが好きなんだ」

優香「……」

葉山「もし、よかったらって話で。やっぱり、ゆっくり休んで帰った方がいいかな？」

莢夏の顔を横目で見る優香。莢夏の虚ろな目を見て、葉山に頭を下げる優香。

優香「連れていってもらっていいですか？」

葉山「いいよ、朝、四時起きとかになるけど」

鉦太「俺も行きたい」

葉山「早起きできたらな」

○走行中の車内

夜明け前の薄暗い街。店の灯りがぼつぼつと点いている。運転している

葉山。助手席に鉦太。後部座席には、優香と莢夏が座っている。

優香「すみません、朝早くから」

葉山「いいよ、俺も久しぶりに函館山、行きたくなったから」

莢夏「……あの、それから、ごめんなさい。私、名前も嘘ついてました。私、本名は片桐莢夏っていいいます」

葉山「何だよ。もう、ハーフって信じてたよ。」

何だよ、『ドリー』って」

莢夏「……すみません」

葉山「……『さやか』ってどんな字、書くの？」

莢夏「莢エンドウの莢に夏です」

葉山「……そっか」

○函館山 山頂

車から降りる優香、莢夏、葉山、鉦太。

薄暗い空に浮かぶ街の灯り。

ゆっくりと朝日が昇り、景色が明るくなつていく。

莢夏「私、朝日を見るのも初めてでした」

葉山「来てよかった？」

優香・莢夏「はい」

葉山「なら、よかった」

× × ×

風景の写真を撮っている莢夏と葉山を後ろから見ている優香と鉦太。

優香「お母さんに会えなくて、さみしい？」

鉦太「うん、時々すごく寂しくなる」

優香「そうだよね」

鉦太「でも、お店の中には、お母さんの好

きなものがたくさんあって、面白いから。何か、そういうの見てるとお母さんと話をしてる気分になる」

優香「私にも、お姉さん、いたよ。莢夏が生まれる前に死んじゃったお姉さん」

鉦太「どんなお姉さん？」

優香「うーん、親の見てないところで色々、（思いだして苦笑）髪の毛引つ張られたりとか、頭からポカリかけられたりとか」

鉦太「それは、ちょっとやだね」

優香「嫌われたのかなー、私、何かしたかなー、親の前では猫かぶりやがって、こいつ、嫌だなーとか思ってたら、死んじやった」

莢夏の後ろ姿を見つめる優香。

優香「もし、話っていうか、何かを伝えら

れるとしたら、こんな家族でごめんねって」

優香と鉦太のところまで戻ってくる

莢夏と葉山。

鉦太「父さん、俺、お腹すいた」

○函館朝市

歩いている優香、莢夏、葉山、鉦太。

○同・定食屋 澤太郎 店内

カウンター席に横並びに座る優香、莢夏、葉山、鉦太。四人の目の前には海鮮丼が置かれている。手を合わせて、食べ始める四人。

× × ×

優香、葉山の丼は空になっている。

優香「めちゃくちゃおいしかったです」

葉山「それはよかった」

優香「莢ちゃんは？ あんまり減ってない

じゃない」

隣の莢夏の丼を覗き込む優香。

莢夏、涙を流しながら、海鮮丼をほおばっている。

優香「何で？ え？ 海鮮丼、食べて泣くの？」

莢夏「……おいしい」

優香「いままで、泣かなかったくせに何で、ここで泣くかなあ」

葉山「俺の料理では一回も泣かなかったのに」

鉦太「俺も父さんの料理より、海鮮丼のほうが好きだな」

しよげている葉山。無心で海鮮丼を平らげる莢夏と鉦太。三人の様子を見て、笑みがこぼれる優香。

○墓地

『葉山家之墓』と刻まれた墓石に花を供える優香と莢夏。その背後に立つ

葉山と鉦太。

葉山「喜んでるよ。雪絵は賑やかなのが、好きなんだ」

鉦太「みんなで一緒にご飯、食べたかったね」

手を合わせる優香と莢夏。

○ペトルーシユカ 一階 レストラン

中に入る優香、莢夏、葉山、鉦太。

葉山「ちよっと待っててくれる」

レジ横の棚の引き出しを開け、中から白い箱を取り出し、莢夏に手渡す
葉山。

葉山「これ、妻から預かってたんだ。入院中に作っててさ。いつか、莢エンドウに夏って書く、片桐莢夏さんがもし、店に来たら、渡してって」

箱を開ける莢夏。

羽を広げている白鳥の置物である。

莢夏「私、前に渡り鳥が好きって、チャットで話したこと、あつて」

白鳥の置物を掌の上に乗せる莢夏。

莢夏「(涙ぐんで)……雪絵さん」

優香「白鳥って凶暴で、暴れると手がつけられないんだって。ぴったりじゃなか」

莢夏「(涙声で)うるさい」

笑う葉山と鉦太。

○同 店前 道路

スーツケースを持った優香とリュックサックを背負った莢夏。

葉山「お元気で。また、函館に寄ることが

あったら、顔を見せに来てください」

鉦太「また、泊まりにおいでよ」

深々と頭を下げる優香と莢夏。

莢夏「ありがとうございます」

優香「本当にお世話になりました」

葉山「雪絵の友達が会いに来てくれて、うれしかったよ」

莢夏「……（涙声で）私もです」

笑顔で手を振り、歩き出す優香と莢夏。

○航海中の青函フェリー デッキ

遠ざかっていく函館山。

函館山を見つめる優香と莢夏。

優香「ねえ、雪絵さんとのチャットの中でさ、私の話って出た？」

莢夏「ああ、うーんとね。『莢夏ちゃん、妹は可愛いけど時々うざいって言ってた』って」

優香「（笑う）」

莢夏「何か、雪絵さんね、『莢夏』のことを優しいって褒めたら、『私、別に優しくなれない。妹にはたまに意地悪する』って」

優香「へえ」

莢夏「『莢夏ちゃんのこと、裏表のない、いい子だと思ってたから意外だった』って」

優香「他には？」

莢夏「私が聞いたのはそれだけ」

優香「そっか、ねえ、私が綺麗な石をね、お姉ちゃんにあっさりあげられたのは、その前にお姉ちゃんから、もらってたからだよ」

莢夏「……そう」

優香「いつもね、お菓子やおもちやを私に先に選ばせてくれたの。そういうお姉ちゃんだったの」

莢夏「優ちゃん、ごめんね」

優香「どうしたの？ 急に」

莢夏「優ちゃんは何でもできる、何にでもなれる私のヒーローだよ」

優香「（笑って）どうしたの？ 変な物食べた？ お腹壊した？」

莢夏「私、ずっと優ちゃんがうらやましか

ったの。昔からずっと」

優香「お……莢ちゃん？」

穏やかな笑みで優香を見つめる莢夏。
優香、言葉を発しようとするが、首を振って、莢夏に笑みを返す。照れ笑いをして、雪絵にもらった白鳥を頭に乗せる莢夏。遠ざかっていく函館山。

○老人ホーム 梅の園 外観

○同 来客スペース

二十人ほどの高齢者達がテレビを見たり、談笑したりしている。奥の二人掛けのテーブルで向かい合っている優香と美恵。美恵、穏やかな笑み

を浮かべながら、優香の話を聞いている。

恵。

優香「この間、相談した件だけどね、やっぱり、あの家、売りに出そうと思ってる」

美恵「そう」

優香「それから、仕事も辞めることにした。

莢ちゃんを置いて、夜勤とかできないから、もう少し拘束時間の短い職場を探すわ」

美恵「……大丈夫なの？」

優香「資格職だから、大丈夫。どこへ行ったらってやっていけるよ」

美恵「あなたにばかり、苦労かけるわね」

優香「(笑って) 今さら」

美恵「そうね、今さらよね」

笑いながらも、複雑な表情になる美

美恵「あの子のためにできるだけ広い部屋がいいんだけど」

優香「そんなお金、残ってない。それに、どこのマンションだって一緒よ」

美恵「……そうよね、どうせ閉じ込めるんだから、一緒ね。あの子、最近、どうしてる？」

優香「漢方のね、お薬をね、試しに飲ませて見たら、身体に合ってたらしくて、前よりも元気になった。性格も前より穏やかになったみたい」

美恵「そう」

優香「あと、前よりもよく眠るようになった。

いいことなのよね、たぶん」

美恵「よかったじゃない」

優香「口には出さないけど、ママがいなくなつて、寂しいみたい」

美恵「……そのうち、慣れるわ。あの子ももう、大人なんだから」

優香「……そうね、じゃあ、そろそろ帰るわ」

美恵「ええ、ここ遠いでしょう？　こんなにひんぱんに来なくてもいいわ」

優香「（微笑んで）元気でね」

美恵「あなたもね」

美恵に背を向けて、歩きだす優香。

○片桐家　リビング

ソファに横たわつてゐる莢夏。

莢夏の横に座っている優香。

莢夏「この家にいられるのもあと、一週間か」

優香「うん」

莢夏「やっぱり、少しさみしいね」

優香「（微笑んで）次はどこに行く？」

莢夏「次なんてあるの？」

優香「……前よりも元氣になったじゃないの」

莢夏「うん、関節痛とかは十分、よくなつたよ。でも、毎日、眠くつて仕方がないの」

優香「……最近、嫌な夢は見る？」

莢夏「ううん、眠りが深いから最近は夢を見ないの」

優香「よかったじゃない」

莢夏「（寂しげに笑い）うん」

優香「（莢夏の不安を察して）……よくなつ

たんだよ」

莢夏「私ね、呪いはずっと自分にかかつてると思つてた。でも、あなたも同じだつ

たんだね……やつと、分かった」

優香「莢ちゃん？」

莢夏「（微笑んで）優ちゃんは、好きなこと、

いっぱいすればいい」

優香「そんなのどうでもいい」

莢夏の手を握る優香。

優香「また、マジック見せてよ」

莢夏「鈍っちゃったから、練習しないと」

優香「大丈夫。失敗したら、頭から消火器、

ぶっかけてあげる」

莢夏「（笑う）」

優香「マジック始めるきっかけになったの

って、やっぱり、雪絵さん？」

莢夏「うん、ロシアってどんなどこかなっ

て思ってた、調べたら、ポリシヨイサー

カスの動画、見つけたの」

優香「そっか」

莢夏「魔法使いみたいでさあ……あ、私、

これ、やりたいって」

優香「もつと、やってよ。また、一緒に面

白いことできる場所に行こうぜ」

莢夏「（笑って）優ちゃんのピアノ聴かせて」

優香「いいよ、弾いたげる。どんな曲がい

い？」

莢夏「『動物の謝肉祭』」

× × ×

ピアノを弾く優香。『水族館』の旋律。

ピアノを弾く優香を見つめる莢夏。

× × ×

演奏している優香。『白鳥』の旋律。

優香の背後に莢夏と同じ顔をした女

が立っているが、優香は気づかない。

女に笑いかける莢夏。女も莢夏に笑顔返す。

× × ×

演奏を終える優香。莢夏は安らかな寝息を立てている。莢夏の身体に毛布をかける優香。

○境港 全景

○同 フェリー乗り場

大きなスーツケースを転がしながら、歩く優香。

アナウンス「ウラジオストク行きフェリー、ご搭乗予定のお客様は―」

ウラジオストク行きのフェリーを見上げる優香。スマホを取り出し、電

話をかける優香。

葉山の声「もしもし」

優香「片桐です。今、いいですか？」

葉山の声「いいよ、どうしたの」

優香「ありがとう、葉山さん。私、私達、

あの旅のおかげで、何か、元気でたんです」

スーツケースをなでる優香。

優香「何か、私達、自分らで思ってるよりも色んなこと、できるんじゃないかなって」

○ペトルーシカ 一階 レストラン

受話器を耳に当てている葉山。

葉山「そう、思ってくれたんなら、俺も鉦太もうれしいよ」

優香の声「一つ、頼みたいことがあるんです」

葉山「何？」

優香の声「私達のこと、他の人には内緒に
してもらってもいいですか？」

葉山「……分かった」

鉦太、葉山に代わってと自分を指さ

す。鉦太、葉山から受話器を受け取り、

鉦太「また、泊まりにおいでよ」

優香「ありがとう」

○境港 フェリー乗り場

スマホを耳に当て、寂しげに笑う優

香。

優香「少し……だいぶ……先になるかも」

○ペトルーシカ 一階 レストラン

受話器を耳に当てている鉦太。

鉦太「それでも、いいよ。おいでよ」

葉山、受話器に顔を近づけて、

葉山「いつでも来なよ。もっと、料理上手

くなって、店、潰れないように頑張るか

らさ」

○境港 フェリー乗り場

スマホを耳に当て、フェリーを見上

げている優香。

優香「ありがとう。もう、船に乗るから、

切るね。私達、絶対、忘れないです」

鉦太の声「うん、俺も二人とも強烈な客だ

ったから、たぶん、忘れないよ」

微笑む優香。

優香「ありがとう。あの四日間は夢じゃな

かったんだなって、今、思い出せてよか

った」

スマホを切る優香。船の汽笛が響く。

○ペトルーシユカ 一階 レストラン

受話器を戻す鉦太。

鉦太「何か、これから、船に乗るらしいよ」

葉山「へえ、いいな、旅行かな」

鉦太「俺達の事、忘れないって」

葉山「……鉦太、あの二人のことは、他の

人には話しちゃだめだ」

鉦太「どうして？」

葉山「多分、聞いたら、だめなことなんだ」

雪絵、葉山、鉦太の映った写真を手

に取る葉山。

葉山「俺達、家族三人の秘密だ」

○境港 フェリー デッキ

ベンチに座っている優香。優香の隣の席に、外国人の母親と十歳ほどの女の子が座る。女の子が優香のスーツケースをじっと見つめる。ベンチから立ち上がる優香。優香のスーツケースから、紅葉の葉が一枚ひらひらと地面に落ちる。女の子、紅葉の葉を拾い、優香を追いかけて、優香に紅葉の葉を渡す。

優香「ありがとう」

女の子「（ロシア語で）どういたしまして」

立ち去ろうとする女の子。

優香「（ロシア語で）待って」

振り向く女の子。女の子に紅葉の葉を手渡す優香。

優香「(ロシア語で)これ、あげる」

女の子「(ロシア語で)ありがとう」

優香に笑顔で手を振り、母親の元に走っていく女の子。スーツケースから聞こえるノックの音。ノックを返す優香。

スーツケースの下に落ちている紅葉の葉を拾い、スーツケースを開ける優香。

スーツケースの中から伸びる白い手。白い手に紅葉の葉を渡す優香。受け取る白い手。そのまま指きりをする。微笑む優香。

○航海中のフェリー デッキ

遠ざかっていく陸地。

優香と莢夏が並んで、海を見ている。優香と莢夏、ポケットから大量の紅葉の葉を取り出す。優香と莢夏、紅葉の葉を両の掌の上に乗せる。風に飛ばされていく紅葉の葉。何枚かの紅葉の葉が空中で花火のように燃え尽きる。

空中に響き渡る指笛と拍手。

(了)

本電子書籍は、2017年12月1日発行の『第23回函館港イルミネーション映画祭2017 第21回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第23回函館港イルミネーション映画祭2017

第21回シナリオ大賞 函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品

夢の続きを空でみる

作：緒方 苑

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2018年2月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
